

# 主日礼拝説教「神の子は真ん中に座して」

日本基督教団石神井教会 2018年1月7日

## 【旧約聖書日課】ゼカリヤ書 8章1～8節

1万軍の主の言葉が臨んだ。

2「万軍の主はこう言われる。

わたしはシオンに激しい熱情を注ぐ。激しい憤りをもって熱情を注ぐ。

3 主はこう言われる。

わたしは再びシオンに来て、エルサレムの真ん中に住まう。

エルサレムは信頼に値する都と呼ばれ、万軍の主の山は聖なる山と呼ばれる。

4 万軍の主はこう言われる。

エルサレムの広場には、再び、老爺、老婆が座すようになる

それぞれ、長寿のゆえに杖を手にして。

5 都の広場はわらべとおとめに溢れ、彼らは広場で笑いきざめく。

6 万軍の主はこう言われる。

そのときになって

この民の残りの者が見て驚くことを、わたしも見て驚くであろうかと

万軍の主は言われる。

7 万軍の主はこう言われる。

見よ、日が昇る国からも、日の沈む国からも、わたしはわが民を救い出し

8 彼らを連れて来て、エルサレムに住ませる。

こうして、彼らはわたしの民となり

わたしは真実と正義に基づいて、彼らの神となる。

## 【福音書日課】ルカによる福音書 2章41～52節

41 さて、両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした。42 イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った。43 祭りの期間が終わって帰路についたとき、少年イエスはエルサレムに残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。44 イエスが道連れの中にいるものと思い、一日分の道のりを行ってしまい、それから、親類や知人の間を捜し回ったが、45 見つからなかったので、捜しながらエルサレムに引き返した。46 三日の後、イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。47 聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。48 両親はイエスを見て驚き、母が言った。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」49 すると、イエスは言われた。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを知らなかったのですか。」50 しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。51 それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことをすべて心に納めていた。52 イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人々とに愛された。

## クリスマスの物語は続く

新しい年を迎えて一週間。大晦日が日曜日でしたから、今日が新年最初の日曜日です。ようやく皆さんとお会いすることができましたが、もはや新年のご挨拶をするような気分でもないかもしれません。世の中では、正月飾りこそまだ残っていますが、すでにお正月気分から日常生活に切り替わりつつあるようです。「正月気分は、もうおしまい」というわけです。世の中の気分に合わせてるように、教会でも、アドヴェントから灯していた礼拝堂のキャンドルを、昨日 6 日の「公現日」に片づけてしまいました。クリスマスの飾りも、ほとんど片づけてしまいました。気分は「もうクリスマスはおしまい」というわけです。

けれども、わたしたちがクリスマスに聞き始めた物語は、まだ始まったばかりです。御子キリストを迎えた家族の物語、御子が共にいる家族の物語。その物語の初めの触りを聞きながら新年を迎えたわたしたちは、迎えたこの年に、その物語の続きを聞き続けるように、導かれてきたのです。いいえ、それどころか、迎えたこの年こそ、わたしたち自身が本当に御子キリストをお迎えした家族となるようにと、御子が共にいる家族として自分たちのことを語り始められるようにと、導かれて、新しい年を迎えたのです。それが、クリスマスの祈りのうちに新しい年を迎えたわたしたちなのです。

クリスマスの物語で乳飲み子としてお生まれになられた御子イエスは、今日の福音書では 12 歳の少年に成長されています。けれども、幼子のときのようにご自分の家族と一緒にいらっしゃることは、まだ変わりありません。両親である母マリア、父ヨセフと共にいらっしゃった。当時もっとも盛大に祝われていたユダヤの祭、過越祭に合わせて、エルサレムに旅したときも、御子イエスと両親の家族は、一緒だったのです。実際には、この家族は三人だけの《核家族》だったわけではありません。主イエスには四人の弟と他に恐らく二人の妹たちがいました。両親と七人の子どもたちの家族。その家族の長男として育てられたのが、御子イエスです。主イエスが 12 歳のときに、その弟妹が皆生まれていたかは分かりませんが、すでに何人かは生まれていたでしょうし、まだ幼い子もいたかもしれません。祭に合わせてエルサレムに旅したときには、村中の人が集団で巡礼団のようになって旅したといいますが、そうだとしても、まだ幼い子がいるこの家族の旅は、大変だったことでしょう。楽しい旅にしようという思いがあっても、親としてはいつもどこかピリピリしている。そんな旅だったのではないのでしょうか。

クリスマスから始まった、御子イエスのいる家族。それは、どこにでもある普通の家族だったのでしょうか。けれども、そこに御子イエスがいらっしゃる。クリスマスから新たに歩み始めたわたしたちも、そういう家族です。どこにでもある普通の家族。けれども、そこに御子イエスがおいでくださった。御子の家族とされた。それが、クリスマスを祝ったわたしたちです。

わたしたちは、迎えた新しい年を、クリスマスの祈りのうちに歩いて行きます。この一年も、御子キリストが共にいる家族として歩いて行く。そして、クリスマスの物語の続きを、この年も自分たちの物語として語り続けていくのです。

## 《12歳の息子のいる家族》

御子イエスと両親の家族を《聖家族》と呼ぶことがあります。《聖家族》と題された宗教画がたくさん描かれてきました。わたしたちの習慣では、《聖家族》と呼ぶことはほとんどありませんが、それでも、この家族をどこか理想化してイメージしているところはあるかもしれません。マリアとヨセフと御子イエスの家族です。きっと、争いごとなどない、穏やかで平和な家族だったに違いない。互いに礼儀正しくて、しかも優しさに満ちていて、不平不満など生まれてこない家族だっただろう、と。けれども、それはきっと、わたしたちの思い込みでしょう。無い物ねだりの勝手な期待にすぎないと思います。御子イエスの家族は、どこにでもある普通の家族として、庶民の家族として、始められ、営まれていたのに違いないからです。

祭を祝うために総出で旅した家族。その家族の中の長男。12歳の少年。きっと、しっかりした少年だったのでしょ。幼い弟妹がいれば、親は上の子の面倒などいつまでも見ているわけにはいきません。きっと、少年イエスは、一人で行動させても、両親はあまり心配がなかったのでしょ。賢い少年だったので。物怖じせずと大人と話すこともできました。けれども、そういう少年だからといって、いつも両親にとって聞き分けの良い子だったとは限りません。あるいは、両親にとって自慢の子だったわけでもないでしょう。この出来事は、そんなことをうかがわせるエピソードです。

祭が終わって故郷への帰り道に着いた巡礼団の中に、いるはずの息子がいない。そのことに両親が気づいたのは、すでに一日の行程を過ぎてからでした。12歳の息子を、祭の余韻が残るエルサレムの町に、置き去りにしてきてしまったのです。どこではぐれてしまったのか。両親は、来た道を引き返して、捜しに捜しました。すっかり疲れ果てている幼い子らを引き連れて、一日分の道のりを三日かけて捜し回りながら、とうとう、エルサレムの神殿まで戻ってきてしまった。そして、そこにいて平然としている12歳の息子を見つけたのです。

わたしは、我が家の子らが順に12歳を迎えたころから、自分が12歳の少年だったときの気持ちを思い起こすようになりました。どんな気持ちで親と接していたのか、思い出すのです。表面上はともかく、精神的には、親と激しく衝突し始める年齢です。親に対して生意気なことを平気で言うようになる。激しく罵ることもある。そういうことを口に出すかどうかは人それぞれかもしれませんが、12歳の少年には、そういうことが始まっているのです。反抗期です。夫婦二人で始まり、子が与えられるどの家族にも訪れる、大きな危機のときです。しかし、どの家族も、そのような危機を避けて通るわけにはいきません。

福音書によると、御子イエスが両親とエルサレムに旅したのは、毎年のことだったので。ところが、福音書は、御子イエスが12歳のときの出来事だけを伝えています。7歳のときの出来事でもないし、18歳のときの出来事でもない。母マリアにとって、両親にとって、そのときが、家族の大きな危機だったという記憶なのではないでしょうか。息子イエスの言うこと為すことが、分からなくなっ

て、しばしば衝突するようになった時期です。三日も捜し回って、やっと見つけたと思ったら、本人は呑気に大人と議論などしている。驚いて言った母マリアの言葉は、かなり強い口調だったはずです。「なぜこんなことをしてくれたのです。ご覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです」。決して、穏やかに論じているのではない。12歳の生意気盛りの息子に、厳しく叱責している。にもかかわらず、息子は、一言も謝りもせず、親を言いくるめるような返事をしたのです。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」。7歳の息子がそう答えたのなら、親は、「お前は賢い子だ」とほめたかもしれません。けれども、12歳の息子の言い分は、屁理屈にしか聞えなかったでしょう。両親にはイエスの言葉の意味が分からなかったというのは、何も「12歳のイエスが神の子として崇高な御言葉を語られたので、理解できなかった」ということではないのです。

### 《御子のいる家族》

御子イエスの家族は、そういうどこにでもある普通の家族でした。

わたしたちも、そういう家族として歩いていくのです。クリスマスを祝って、御子のお生まれくださったことを信じて、御子がいつもわたしたちの真ん中にいらっしゃるような家族として共に歩み始めて、家族としての営みを毎年毎年繰り返し重ねて行って、でも、その歩みの中で、家族の危機を迎えることもある。お互いが衝突したり、悲しい現実を迎えたり、苦しい状況に陥ったり、「もう、こんな家族いやだ」と思うこともあったり。けれども、御子がお生まれくださったということは、そのような家族の中に、御子が今もいらっしゃるということです。衝突している家族の中にも、悲しい現実の内にいる家族の中にも、苦しい状況を引き起こしている家族の中にも、「もう一緒にやりたくない」と思う家族の中にも、御子がいらっしゃるということです。御子がいて、この家族を、《神の家族》にしてくださいろうとしている、ということです。しかも、幼子のままではなく、12歳の少年のままでもなく、成人して、神と人ともに愛される者として十字架への道を選び取る者たちの家、《神の家族》になるのです。していただくのです。御子に真ん中に居続けていただいて、そうならせていただくのです。

わたしたちの、人としての家族が、そして教会が、御子に真ん中においていただいて、《神の家族》として成長させていただくことを願う。それが、クリスマスの祈りのうちに新年を迎えたわたしたちの、心に刻むべきことです。

ここも、《御子の家族》です。《神の家族》としていただく家族です。だから、わたしたちは願うのです。この家族に、加わっていただきたい。一人残らず、加わっていただきたい。そして、御子と共に成長させていただくのです。御子と向き合うことによって、成長させていただくのです。永遠に、いつまでも、共に成長させていただくのです。すべての人の心の真ん中に御子がお生まれくださり、十字架の主として宿ってくださるときまで、《神の家族》は、この地上を歩み続け、営み、成長しつづけるのです。